

## 地域スポーツ・文化芸術創造と部活動改革に関する実行会議(第 1 回)

益子直美日本スポーツ少年団本部長 意見

以下、2 点の視点からご意見申し上げます。

## ■ 「論点 1(4):地域スポーツ・文化芸術推進体制の構築」について

- ・ これまでのスポーツの機会が、地域へ移行することにより、スポーツにおける体験の格差を助長させるようなことは避けるべきと考えます。
- ・ 日本スポーツ少年団は、現在、全国で約 2 万 5 千の単位団に、約 54 万人の団員が所属しています。
- ・ 関係者と話し合う中、「都市部はスポーツに対する選択肢が豊富にあるが、地方の中にはスポーツ少年団しかない」という切実な声も聞いています。
- ・ 一方、「卒団」という言葉に象徴されるように、多くのスポーツ少年団は小学生のためのものという認識があります。スポーツ少年団の登録には年齢制限はありません。実際、数は少ないですが、中学生、高校生が団員として活動するスポーツ少年団もあります。さらに、「リーダー」という、中学生から大学生年代に対して、次の指導者や団運営を担う人材を育成する仕組みもあります。
- ・ スポーツ少年団としては、地域の受け皿、とりわけ選択肢が限られる地域での受け皿として、基盤整備に一層努めて参ります。

## ■ 「論点 1(6):時代に即した指導者の質の保障・量の確保」について

- ・ 日本スポーツ少年団本部長として、また、「監督が怒ってはいけない大会」の主催者として、“子供たちが笑顔で心からスポーツは楽しい”と言えるスポーツ環境を整えていこうとする中で、子供たちと最も距離の近い監督や指導者の振る舞いが、良くも悪くも子供たちに大きな影響を与える姿を目の当たりにしてきました。
- ・ 子供たちが自分の目指すところや、技術レベルに応じてスポーツを楽しむことができる環境を整えることが大切です。指導者は教え込むのではなく、考えさせる余白を残す指導をお願いしたいと考えます。
- ・ スポーツ少年団指導者には、日本スポーツ協会公認スポーツ指導者資格の取得を義務付けています。そのカリキュラムにおいては、指導者は指導対象との対話に基づく指導の実践を求めています。
- ・ また、「監督が怒ってはいけない大会」では、スポーツマンシップを考えるセミナーを取り入れています。先日開催の小学生を対象としたバレーボール大会において、以下のようなやり取りがありました。
- ・ 「自分がスポーツマンだと思う人？」との質問に対し、参加者のほとんどの手が挙がらず、その理由をたずねると、『全国大会に行っていないから』『サーブがうまく入らないから』『背番号がチームで最後の番号だから』との答えが返ってきました。
- ・ この事例のように、スポーツの入口から、勝利至上主義の価値観が広がっていると感じ、改めて我が国におけるスポーツの意義、価値を、正しく子どもたちに伝えることのできる指導者の重要性を感じました。

- ・ そして、暴力・暴言等のハラスメントの根絶のためには、ハラスメントを未然に防ぐ啓発活動としての「予防」と、起きてしまった時の「対処」が必要です。
- ・ 対処にあたっては、相談できる窓口の整備と問題が起きたときに対応する主体の存在、また、処分の仕組みが必要と考えます。
- ・ これまでは教育委員会や学校において対応されてきましたが、地域クラブ活動において、それをどこが担っていくのか、行政とスポーツ団体が連携して対応する仕組みを検討すべきと思います。